

2026年「第34回世界病者の日」教皇メッセージ  
サマリア人のあわれみ——他者の苦しみを担うことで愛する

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

第34回「世界病者の日」は2026年2月11日にペルーのチクラヨで莊厳に祝われます。わたしはこの機会に、病者をはじめとした困窮する人々、苦しむ人々に注意を向けるために、よいサマリア人の姿をあらためて提示したいと望みました。それは、愛のすばらしさとあわれみの社会的次元を再発見することにおいて、つねに現代的意味をもち、必要とされるからです。

わたしたちのだれもが、聖ルカによる感動的な箇所を耳にするか、読んだことがあります（ルカ10・25-37参照）。わたしたちが愛さなければならない隣人とはだれかと質問したある律法学者に対して、イエスは一つの物語を語ることによって答えます。エルサレムからエリコに向かって旅をしていた人が追いはぎに襲われ、瀕死の状態にされました。祭司とレビ人は道の向こう側を通って行きましたが、あるサマリア人は彼をあわれに思い、傷に包帯をして、宿屋に連れて行き、治療費を払いました。わたしは、敬愛すべき前任者である教皇フランシスコの回勅『兄弟の皆さん』を解釈の鍵として、この聖書箇所について考察したいと思います。この回勅の中で、困窮する人に対する思いやりとあわれみは、単なる個人的な努力にとどまらず、さまざまな関係の中で実現されます。すなわち、困窮する兄弟との関係、彼らを世話する人々との関係、わたしたちにご自身の愛を与えてくださる神との関係です。

### 1. 出会いのたまもの——近しさと寄り添いを与える喜び

わたしたちはスピードと即時性と性急さの文化の中に浸されていますが、同時に、使い捨てと無関心の文化の中にも浸されています。そのため、周囲にある必要と苦しみに目を向けるために近づき、途中で立ち止まることができません。このたとえ話は、サマリア人が傷ついた人を見たとき、「道の向こう側を通る」ことなく、その人に対して開かれた注意深いまなざしを、すなわちイエスのまなざしを向けたと語ります。このまなざしが、サマリア人を人間的な連帯をもって寄り添わせました。サマリア人は「足を止め近づいて、自ら手当てをし、懐を痛めて世話をしました。この人は何よりも、[……]自分の時間を差し出したのです」(1)。イエスは、隣人とはだれなのかを教えるのではなく、どのように隣人になるのか、すなわち、どのようにわたしたち自身が寄り添うのかを教えます(2)。わたしたちはこのことに関して、聖アウグスティヌスとともに次のようにいうことができます。主が教えたかったのは、だれがこの人の隣人であるかではなく、人がだれの隣人にならなければならぬかということでした。実際、進んで人に近づかなければ、だれも隣人にはなれません。だから、あわれみを示した人が隣人となったのです(3)。

愛は受け身のものではありません。愛は他者へと向かいます。隣人であることは、身体的・社会的に近づくことによるのではなく、愛する決断によります。だからキリスト者は、傷ついた人類に近づいてくださった神なるまことのサマリア人、キリストの模範に従って、苦しむ人々の隣人となるのです。それは単なる博愛的な行為ではなく、他者の苦しみに個人的にあずかることは自分自身を与えることだということをそこから感じ取らせててくれるしです。それは、わたしたちの人格がたまものの一部となるために、必要を満たす以上のことを行うことです（4）。この愛は、必然的に、愛するためにわたしたちにご自身を与えてくださったキリストとの出会いによってはぐくれます。聖フランシスコはハンセン病患者との出会いについて語りながら、次のように述べて、このことをきわめてすばらしいかたちで説明しました。「主ご自身がわたしを彼らの中に導き給うた」（5）。なぜなら、聖フランシスコは彼らを通して愛することの甘美な喜びを見いだしたからです。

出会いのたまものはイエス・キリストとのきずなから生まれます。わたしたちはこのかたを、わたしたちに永遠の救いをもたらし、わたしたちが傷ついた兄弟に身をかがめるときに仰ぎ見る、よいサマリア人と考えます。聖アンブロジオは次のように述べます。「それゆえ、わたしたちの傷をいやしてくださったかた以上にわたしたちの隣人であるかたはいないのだから、このかたを主、また隣人として愛そうではないか。実際、頭よりもからだの部分に近いものはない。キリストに倣う者をも愛そうではないか。からだの一致のゆえに、他者の苦しみのために苦しむ者をも愛そうではないか」（6）。寄り添われ、ともにいていただき、愛を与えられ、分かち与えられることによって、一なるかたのうちに一つであることが、聖フランシスコと同じように、キリストと出会う甘美さを味わうことです。

## 2. 病院をケアする共通の使命

聖ルカは続けて、サマリア人が「あわれに思った」と述べています。あわれむとは、行動を促す深い情動を表します。それは内面からわき起こり、他者の苦しみにかかわらせる感情です。このたとえ話の中で、あわれみは行動的な愛の際立った特徴です。それは理論でも感傷でもなく、具体的な行動につながります。サマリア人は近寄り、傷を治療し、傷ついた人を引き受け、ケアします。しかし注意しなければならないのは、サマリア人がこれを一人で個人的にしたのではないということです。「サマリア人は、あの男の人の面倒を見てくれる宿屋の主人を求めました。わたしたちも広く呼びかけて、小さな個の集合よりも強力な『わたしたち』に巡り合うよう招かれています」（7）。わたし自身も、ペルーでの宣教者また司教としての経験の中で、多くの人がサマリア人と宿屋の主人が示したようなあわれみと思いやりを共有しているのを目の当たりにしました。家族、隣人、医療従事者、医療司牧に携わる人々や他の多くの人々が、立ち止まり、近寄り、ケアし、担い、同伴し、自分がもてるものを与えながら、あわれみに社会的な次元を与えます。人間関係のネットワークの中でのこの経験は、単なる個人的な取り組みを超えるものです。そのためわたしは使徒的勧告『わ

たしはあなたを愛している——貧しい人々への愛について』(Dilexi te) の中で、病者のケアが教会の使命の「重要な部分」であるだけでなく「教会的な行為」(同 49) であることを示しました。わたしは同書の中で、このような次元がわたしたちの社会の健全さをどのように証明することができるかを示すために、聖チプリアノのことばを引用しました。「この疫病は恐ろしくて致命的なものと見えはするが、おのの正義や心を吟味するために、これほど適切で、これほど必要なことがあろうか。健康な者が病気の者を世話したかどうか、近親者がその親族を愛情込めて愛したかどうか。主人たる者が使用人の疲労や衰弱に同情したかどうか、医師は懇願する患者を見捨てたりしなかったかどうか」(8)。

一なるかたのうちに一つであることは、わたしたちが一つのからだの真の部分であると感じることを意味します。わたしたちはこのからだの中で、自らの召命に応じて、すべての人の苦しみに対する主のあわれみをもたらすのです(9)。さらに、わたしたちの心を動かす苦しみは、見知らぬ人の苦しみではなく、わたしたちの同じからだの部分の苦しみです。このからだの頭であるかたは、わたしたちがすべての人の善のためにケアを行うように命じます。この意味で、わたしたちのケアはキリストの苦しみと一致します。そしてそれは、キリスト教的な精神をもって行われるとき、すべての人が一つになることを願う救い主の祈りの実現を早めます(10)。

### 3. 自分と兄弟とに出会うために、神への愛につねに突き動かされる

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ 10・27)。わたしたちはこの二つのおきてのうちに、神への愛を第一に優先すべきことと、その帰結としての、あらゆる次元における愛し方、人とのかかわり方を見いだすことができます。「隣人への愛は、神への愛が真実なものであることの具体的な証拠です。使徒ヨハネがあかしするとおりです。『いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくれなり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。[……] 神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまっています』(一ヨハネ 4・12、16)」(11)。たとえこの愛の対象が異なり——神、隣人、自分自身——、その意味でそれぞれ別の愛と理解することができるとしても、それらはつねに切り離すことができないものです(12)。神への愛を第一に優先すべきことは、人間の行為が、個人的な利益や報酬なしに、儀式の枠にとどまることなく眞の礼拝となる、愛の現れとして行われなければならないことを意味します。隣人に仕えることは、それによって神を愛することです(13)。

このような次元は、わたしたちが自分を愛することの意味を理解することも可能にします。それは、自尊心や自己評価を成功やキャリアや地位や家柄といった固定観念に基づかせようとする思いから離れ(14)、神と兄弟の前での自分の位置を再発見することを意味し

ます。教皇ベネディクト十六世は次のように述べます。「靈的な存在として、人間は人間関係を通して自らを実現していきます。人間がこの関係を真正に生きれば生きるほど、自らの個人としてのアイデンティティは成長していきます。人間が自分の尊厳を確立するのは、孤立によってではなく、他者および神との関係に自分を置くことによってです」(15)。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。「人類の傷をいやす真の薬は、神への愛に根ざした兄弟愛に基づく生き方です」(16)。わたしたちのキリスト者としての生き方が、このような兄弟愛の次元を欠くことがないようわたしは願います。それは、神との一致とイエス・キリストへの信仰に深く根ざした、「サマリア人の」、すべての人に開かれた、勇気ある、参加的で、連帶的な次元です。わたしたちは、この神への愛によって燃え立たせられるとき、すべての苦しむ人、とくに病者、高齢者、苦難のうちにいる兄弟の善のために真に自分をささげができるのです。

病者の救いである聖なるおとめマリアにわたしたちの祈りをささげたいと思います。すべての苦しむ人、あわれみと傾聴と慰めを必要とする人のためにマリアの助けを求めます。そして、病気や苦しみのうちにいる人々のために家庭の中で唱えられてきた次の古くからの祈りをもって、マリアの執り成しを願います。

甘美なるみ母よ、わたしから離れず、  
御目をわたしからそらさないでください。  
どんなときにもわたしとともにいて、  
わたしを一人にしないでください。  
あなたはつねにわたしの守り  
わたしのまことの母。  
父と子と聖霊がわたしを祝福してくださるようにお祈りください。

すべての病者とそのご家族、介助者、医療従事者、医療司牧に携わる人々、とくにこの「世界病者日」に参加する人々に、心からわたしの使徒的祝福を送ります。

バチカンにて、2026年1月13日

教皇レオ十四世

## 注

- (1) 教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』(2020年10月3日) 63 (*Fratelli tutti*)。
- (2) 同80–82 参照。
- (3) 聖アウグスティヌス『説教』(*Sermones*, 171, 2; 179 A, 7) 参照。
- (4) 教皇ベネディクト十六世回勅『神は愛』(2005年12月25日) 34 (*Deus charitas est*)、

教皇聖ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドローリス——苦しみのキリスト教的意味（1984年2月11日）』28（*Salvifici doloris*）参照。

- (5) アッシジの聖フランシスコ『遺言』（*Testamentum, 2: Fonti Francescane*, 110〔坂口昂吉訳、『中世思想原典集成 12 フランシスコ会学派』平凡社、2001年、85頁〕）。
- (6) 聖アンブロジオ『ルカ福音書注解』（*Expositio Evangelii secundum Lucam*, VII, 84）。
- (7) 教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん（2020年10月3日）』78（*Fratelli tutti*）。
- (8) 聖チプリアノ『死を免れないことについて』（*De mortalitate*, 16〔吉田聖訳、『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社、1999年、294頁〕）。
- (9) 教皇聖ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドローリス——苦しみのキリスト教的意味（1984年2月11日）』24（*Salvifici doloris*）参照。
- (10) 同31参照。
- (11) 教皇レオ十四世使徒的勸告『わたしはあなたを愛している——貧しい人々への愛について（2025年10月4日）』26（*Dilexi te*）。
- (12) 同参照。
- (13) 教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん（2020年10月3日）』79（*Fratelli tutti*）参照。
- (14) 同101参照。
- (15) 教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』53（*Caritas in veritate*）。
- (16) 教皇フランシスコ「第33回国際ユースフェスティバル(MLADIFEST)（メジュゴリエ、2022年8月1日－6日）参加者へのメッセージ（2022年7月16日）」。

（カトリック中央協議会事務局訳）